

する。ここにこそ一切の人民自治の鍵がある。ここにこそ人民を略奪し蔑視と抑圧を系統化している支配グループの最大の急所がある。

万国のプロレタリア団結せよ。

多様に多元に創造性にみちて団結せよ。

① 暴力論(下)

一三一頁

この章の四の箇所は次の通りだ。「選挙的民主主義は、取引所の世界によく似ている。…彼らは近代産業の諸驚異に眩惑されている。…議会体制は、株主総会と全じようにこまかされている。…民主政治は、不謹慎な資産家たちの夢想する宝の国なのだ。」

注(暴力論は岩波文庫 他は国民文庫他)

- ② わが国の革命におけるプロレタリアートの任務三一頁
- ③ 国家と革命 二九頁
- ④ 全 書 三四頁
- ⑤ 一步前進 頁
- ⑥ 全 書 八六頁
- ⑦ 全 書 七九頁
- ⑧ 何をなすべきか 九一頁

⑨ 一步前進

二六八頁

⑩ 全 書

二七五頁

⑪ 何をなすべきか

頁

⑫ 一九世紀革命の一般理念

一二三頁

⑬ 全 書

一三一頁

⑭ 党内の意見の相違についての小論

七九頁

⑮ 「ザーリア」。スターリンの引用箇所

(党内の意見の相違についての小論)

⑯ 徳田球一が黨員についていった言葉

無政府主義論

志摩 弘

序

ありとあらゆる思想が現実世界の〈場〉から離陸して延命の〈場〉へと飛翔した時、その延命の〈場〉は必然的過程として神秘的に凝固し、その神聖化された〈場〉はあくまでも空間的に獲得された〈場〉でしかないが故に、その〈場〉を無限大に觀念に仮構することによって延命している思想は、しよせん現実の時間軸を持つことなどゆるさるてはいない。ここに現代のアナキズムが思想に向けてではなく、文学や美学に向けて上昇し、あるいは現実的事実としては否定されてしまった過去のアナキズムの論理を呪文のように唱えてしまうという思想的奈落へと落下せざるを

得ない。

そして今でもわたしたちはあまりにもアナキズムと云えばブルードンやクロポトキン、バクーニン等しか想起できない思考に汚染されきっている現状である時、アナキズムとは何かという自問はある一定の有効性を持っている。ブルードンやクロポトキン、バクーニン等が思想的には完全に異質であるのにもかかわらず、彼らを一括して包み込むところのアナキズムという概念の内実とは何であるのか。考え方によればブルードンとバクーニンの思想的異質よりも、はるかにバクーニンとマルクスは思想的類似性を持つており——バクーニンはマルクスの党独裁に類似する概念としてきわめて抽象的ではあるが秘密独裁を過渡的世界における権力形態として位置づけている——注一—そういう意味に

においてブルードンやバクーニンがアナキストであるのなら不思議なことにマルクスさえもアナキストという概念に含まれてしまうのである。

右のようなアナキズムという無規定的な概念に対して現在でもこの無規定性そのものがアナキズムであるといういい加減な聞き直りがあるが、全てを包括するアナキズムなどはそのアナキズムの内実が他の思想を否定するだけの充実したものではないということの裏返しでしかすぎない。アナキズムが無内容であるかぎり全ての思想はアナキズムに当てはまるだけである。よってブルードンやバクーニンをアナキストとして規定するのは非常に曖昧であって厳密にいうならばブルードン主義者でありバクーニン主義者であって同様マルクスはマルクス主義者なのである。

アナキズムという主語に対する述語的世界がこのように不定形であって曖昧である現在、アナキズムを問題にするとは古典的アナキズムを掘起こしてその残光を誇大妄想的に拡大しつづけることではなく、現実の時—空を追撃することなしに「あるべく未来社会」を予見するアナキズムの粉碎を通して現実世界の転位を可能にする論理を構築することであって、その論理がアナキズムという主語に対する

述語的世界の内容として確立されるものである。そこにはアナキズムという主語に対しての述語という主体的言語の思想が不定形としてではなく定形として確立される可能性が存在する。そこでわたしは古典的なアナキズムとの対比からはこれが無政府主義かと思われるような内容をあえて無政府主義論として提出するが、アナキズムが化石化している現在わたしは非—アナキズムを通過して未完の「アナキズム」へ架橋する以外にアナキズムが現在のような美学やドグマから現実世界の転位をせまる思想へと飛翔する可能性などないと信ずる。そしてまず現実世界の関係性の転位は現実世界の関係性の対象化から始めてみようと思う。

【注一】M・バクーニンのネチャーエフにあてた手紙には不可視の力として独裁を位置づけている。

〈存在は意識を規定する〉か

わたしたちは事物的に包囲された幾何学的空間のただ中に存在し、そしてその幾何学的空間は、わたしのこの世の存在以前にすでに構造化された〈場〉として誰かによって

意味づけられた世界であり、そしてこの世にわたしたちが誕生するとは、かかる事物的世界たる場に投げ出されることを意味するというような幻想を身体のみならず浸透させている。よって世界とはこのような幾何学的距離をもった具体的空間性と時間性の上に成立しており、その世界に投げ出され、その世界に規定される人間もまた断じて抽象的、観念的存在ではなく具体的な存在であるとされているが、その具体的存在たる人間存在がもしかして抽象的、観念的な存在であるとしたら何としよう。あるいは又世界という〈場〉はその幾何的距離と時計的時間を持った時—空ではなく本当は人間の観念的空間と時間が生み出した抽象的〈場〉（宗教、法等）であるにもかかわらずに、具体的〈場〉（自然）として幻想されているとすれば何としよう。わたしはここでヘーゲルを逆転したマルクスの逆転を頭に入れながら、マルクスにとって世界における関係性の根底である〈存在が意識を規定する〉というテーゼから問題にしてとりわけ世界の観念性を具体的に解明していきたい。〈存在が意識を規定する〉とはどういうことなのか。とりわけマルクスにとって意識と存在あるいは観念と物質の関係とは何であるのか。

「私の弁証法的方法は、根本的にヘーゲルのそれと相違するばかりでなく、その正反対のものである。ヘーゲルにとっては、彼が理念という名称をもって自立的主体に転化させた思考過程が、その外的現象たるにすぎぬ現実的なものの創造者である。私にあっては、反対に、観念的なものは、人間の頭の中で転変され翻訳された物質的なものに他ならない。」（資本論才二版序）

ここで述べられている意識と存在の関係とは要約するならば〈観念的なものは、人間の頭の中で転変され翻訳された物質的なもの〉として位置づけられており、そしてこの論理は物質的なものが意識から離れて意味を持つという構造を前提としてのみ成立し、その意味を〈頭の中で翻訳された〉時に意識内容すなわち観念的なものが決定される。よって意識とは〈意識された存在〉であり存在過程が意識過程から独立した原初的独自性を先験的に孕んでいるものとして〈存在—意識〉の関係を存在の優位性のもとに展開するのである。そしてそれはマルクスの革命論にも直接的に通底していく。^{注一}

更にまた、マルクスの発想の存在過程の原初的独自性に立脚する論理は自然自体を認めるエンゲルス流の自然弁証

法、更に物質—生産力至上主義のスターリンへ連鎖しているが、わたしたちの日常性の中にもあたかも存在対象が原初的独自性を持って自体的に存在しているという発想は内在している。

それはわたくしたちの日常世界のただ中で、世界を構成している一要素たる色の問題においても、例えば信号機の点滅機の光点が「青」色であるからこそ、わたしたちの網膜に結像する信号機もまた「青」色として世界に開示するというふうに。すなわち信号機の光点の「青」色という存在がわたしの意識にそれを「青」色として規定する。存在の「青」色こそが意識の「青」色を規定しているのである。そしてまたかりにスモッグや霧によって信号機の光点の「青」色が「緑」色へと変色して視覚に現われようと、その「緑」色という視覚像はあくまでもスモッグや霧といった媒介物が「青」色に輝いている信号機の光点をさへぎった結果、わたしたちの網膜に結像した色彩であって、その「緑」という色彩は、信号機の光点の本来的な色彩であるのではなく、あくまでも、スモッグや霧といった媒介物が信号機の光点と網膜との間に介入したという特殊条件の状況にあっての知覚像であって、その「緑」色という知覚像の

外に信号機の光点には本来の色たる「青」色が輝いており、それ故に、信号機の光点たる「青」色は、わたしたちの知覚像ではなく、わたしたちの意識過程から自体的に存在する色として、すなわち信号機の光点の色は原初的独自性を持っていうわけである。であるから信号機の光点の「青」色は、たとえ知覚像において「緑」色であろうと「茶」色であろうと、その「青」色は断じて変色したのではなく、知覚像からは永久に独立している故に、「青」色が「緑」色へと変色しているのは、媒介物によるものかあるいは色盲といった人間存在の網膜組織に非がある場合以外考えられない。まさに信号機の「青」色がスモッグや霧だといって変色されてはたまたまのものではないのであり、いかなる条件においても信号機の「青」色の光点には絶対的に「青」色が輝きつづける。信号機の光点の「青」色とわたしたちの意識の「青」色を以上のように了解するとあきらかに存在は意識から自体的に存在し、「存在は意識を規定する」ものとしてある。わたしたちの世界での「物質」との出会いはいは原初的有色性を持った「物質」であり、その原初的有色性は世界の色として世界を構成する一要素として存在する。このように人間存在を包圍する事象の世界が

色をはじめとする原初的独自性を持って人間存在以前に先験的に構成されているならば、マルクスの云うように世界の現存在は、わたしたち人間存在の現存在を確実に規定し条件づけるであろう。

がしかしこのように即自存在が対自存在に對して超越的に存在し「物質」それ自体が先験的に意味存在として存在することの可能性は奈辺に存在するのか。また自称マルクス主義のサルトルの「即自存在の対自存在に對する存在論的優位性」の論理はいかに導びき出せるのか。即自存在の存在論的優位性のもとに即自と対自、主体と客体との否定関係を指定する論理は、でも近代のデカルト以来の二元論的発想に永遠に呪縛されつづけるのではないだろうか。存在と意識を分離して物質的自然をそれ自身として自己限定して考察するのではなく、物質的自然といえども人間の意識によって世界に開示されるのであるから、物質的自然などは存在せず全て観念的自然としてのみわたしたちには存在するのであるのではないだろうか。今さらスコラ哲学からプレントノー、フッサールへと連鎖した意識の志向性を持ち出すまでもなく、人間の意識を成立させている志向性は必然的に物質を包み込むが、その物質は意識との志向性

に照らされてのみ世界に開示するのであって、事象自体としての物質などではない。わたしたち人間存在の意味的、道具的世界において原初的独自性としての物質との出会いなどないはずである。であるから信号機の光点が「青」色が故にわたしたちの意識に「青」が反映するのではなく、信号機の光点の「青」は原初的有色性としての「青」なのではなく決つてないはずである。信号機の「青」はそれを「青」とする意識との交通関係の中でのみ「青」なのである。信号機の光点の「青」色は、その「青」色を客体として可能にする主体との相関関係においてのみ成立することが可能であるが故に、主体との相関性において、色盲の人間のように信号機の「青」色をたとえば「緑」色として認識することもあり得る。ある人間にとって信号機の色が「青」色であり、またある人間にとって信号機の色が「緑」色であることが現実的に可能であるかぎり、信号機の原初的色彩などあり得ない。信号機の色が「青」色だと幻想されているのは、実は「青」色と認識する人間が量的に「緑」色と認識する人間よりも多いというただそれだけのことであり、かりに信号機の光点を「緑」とする色盲の人間が、それを「青」色だとする人間の数よりも絶対的に多ければ、

信号機の光点は〈緑〉色なのが正常なのである。このように量の論理によって信号機が〈青〉色として位置づけられているにもかかわらず、その〈青〉が質的に〈青〉であるかのように幻視することによって信号機の光点で輝いている〈青〉を原初的独自性の表現だとして認識するところに、とりわけロックのいうところのいわゆる物質の才二次的性質に原初的独自性が意識から離れて自体的に存在するという幻想は存在する。よって物質の才二次的性質に限定していうなら、それは意識から超越的に存在するものではなく、主体と客体との関係の産物であり〈対自存在に對する即自存在の存在論的優位〉などというサルトルの言葉は崩壊してしまうのである。

更に信号機の光点の〈青〉色の問題を展開しながら、唯物論の觀念論に對する脆弱性を見つめるならばこうである。先述したように信号機の光点の〈青〉色はスモッグや霧などの時点に他の色に、たとえば〈緑〉色に変色する可能性を持つているが、しかしその〈緑〉は信号機の点滅機的光点と網膜との間にスモッグや霧が媒介として存在していた時点にわたしたちの網膜に結像した色彩であって、そのスモッグや霧を払いのけるならば、信号機の光点には永遠に

がその帽子から五m先まで近づいてみると、実は〈灰〉色ではなくて〈白〉色の帽子であった。このような時わたしたちは日常的にこれは帽子との距離が百mという遠距離であるが故に、〈白〉色である帽子の色を〈灰〉色に錯覚してみたのだとし、〈灰〉色という知覚像はまちがっており、帽子自体の色は〈白〉色であるが故に〈灰〉色は錯覚なのであって、五m先でみた〈白〉色は近距離であるが故に事象自体の色として了解する。遠くでみれば〈灰〉色であるが近づいてみると〈白〉色であったが故に、対象の色は〈白〉色であるという論理は一見すると真実味を帯ているが、ここには本質的矛盾が孕んでいる。百m先でみた帽子の知覚像が〈灰〉色であって、五m先では帽子の色が〈白〉色であった時、どうして帽子自体の色が〈白〉色であり、百m先でみた〈灰〉色という知覚像は錯覚であるのか。〈灰〉色が百m先での知覚像であるならば、〈白〉色も実は五m先での知覚像であってそれ以上でもそれ以下でもなく、その五m先での知覚像がどうして帽子自体の原初的有色性を表現しているのであらうか。百m先では〈灰〉色に見えて、五m先では〈白〉色に見えた時、その両者を比較して五m先を真実の〈色〉であるとするのは何を根拠にしてな

事象自体の色が、すなわち〈青〉色が輝いているという論理の発想法は知覚色と事象自体の色が、二元論が意識の中で分化しながらも、その分化を事象自体の色に置き換えることでその二元論の分化的状況が意識の中で分裂することなく同居している。故にスモッグや霧の時点における信号機の光点の知覚像たる〈緑〉色は事象自体の色たる〈青〉色へ還元することによって了解されており、知覚色と事象自体の色を比較すると〈緑〉たる知覚色は〈青〉たる事象自体の色に對して非本来的色としてわたしたちは納得している。そしてそれは物質に原初的有色性を前提として措定することによってのみ成立するのである。であるからまた同様なたとえであるが、都会の〈白〉いビルがスモッグによって〈灰〉色に見えようとも、わたしたちはビルを〈灰〉色だとは認識しない。ただ〈灰〉色に見えるだけだと思し、ビルの色はやはり〈白〉色として認識する。なぜなら晴天時にそのビルが〈白〉であることを見ているからである。

がしかしこのような場合はどうであらうか。百m先に〈灰〉色の帽子をかぶった人間を視たとしよう。だがわたし

のか。両者とも知覚像である。東京から遠く彼方の山々を視ると〈黒〉くみえ、その同じ山々を近接した距離でみると〈緑〉に見えるが〈黒〉も知覚色であるように同様〈緑〉も知覚色である。その知覚色を比較してどちらの色彩が本来的な事象自体の色であるのかという発想自体が物質と意識を分離する近代の二元論の領域から突破していないのである。たとえば人工衛星から地球を見ると〈青〉いように色などは距離によっていくらかでも変色し、近くで見ると〈灰〉色が対象自体の色であるというのは、しよせん幻想でしかすぎないのだということをおぼろげにわたしたちは日常性の中でも認識すべきである。都会から遠く離れた山々が〈黒〉いは錯覚であり、山自体の色ではないというのなら、地球からみる遠く離れた星の輝きもまた幻想であり、海が〈青〉くみえるのも非本来的で実は水は透明であるから海の〈青〉も錯覚であるというのであろうか。対象自体の色を限定すると必然的にそのような論理に導き出される。

よって近距離で見える色は事象自体の独自のな色などではなく、あくまでも近距離での知覚像であり、同様遠距離でみる色も遠距離での知覚像にすぎず、たとえ両者の色の知覚が異なっても両方とも正しい対象の色である。それ

故に山の色が「黒」であつたり「緑」であつたり、地球の色が「青」であつたり「茶」であつたりしたところで別にかまわないのであり、そしてそうであるかぎり色とは知覚像であつて断じて、山自体や地球自体の色という原初的独自性をもった色など、たとえ存在しえたと仮定してもわたしたちの世界に開示することはあり得ない。すなわち色に關してわたしたちの存在以前に世界が先験的に構成されているのではなく世界の色はわたしたちの關係において構成され、よつてわたしは世界のただ中にあるのではなく世界そのものである。もはや意識を離れた物質が原初的独自性を持つて世界を構成するなどというのは幻想でしかすぎない。

このように距離の差という細かいことによつても色が異なることを了解して、物質との出会いが原初的有色性を持ち得ないことから、色は意識との相關々係においてのみ世界に現われるのであるが、色の問題は更に距離の問題と裏腹に存在する媒介の問題がある。

たとえば赤いサングラスをかければ対象は「赤」く見えるが、その「赤」とはやはり非——本来的の色なのであるか。又は先述したように対象と網膜との間にスモッグや霧といった媒介が入った時、「白」いビルが「灰」色に見えたり、

「青」い信号が「緑」に見えたりした時の「灰」色や「緑」色は、はたして非本来的「色」なのであるか。

スモッグや霧の時、たとえ信号機が「緑」色に見えたと仮定し、ビルが「灰」色にみえたたと仮定しても、わたしたちはその「緑」色の背後には「青」色の信号機の点滅機が輝いており、また「灰」色の背後には「白」く塗られた壁を持つビルが立っていると認識している。そしていくら信号機の点滅機が「緑」色に見えようと、その光点には「青」が絶対的に輝き、同じようにビル自体は「白」く塗られており、「緑」色や「灰」色に変色するのはスモッグや霧たる媒介物によるものであつて、信号機の「緑」色やビルの「灰」色は非——本来的な色として了解している。このような発想法を常識として日常的に使っているが、この発想法も媒介物とは何であるかということを解き明かしさえすればいとも簡単に崩れる。スモッグや霧という媒介物とは何であるのか。わたしたちはもしスモッグや霧を媒介物として位置づけるならば、その媒介物のない状態を設定しなければならぬ。媒介物のない状態が存在してはじめて媒介物のある状態が、そのない状態との対比の上に存在することができるのであるから。しかし媒介物のない状態とは

何であるのか？ 常識的発想からすると晴天ということに

なるのであるが、晴天とすることによつて信号機の「青」やビルの「白」が本来的色だとする論理が破産する一点である。なぜならば晴天とは無媒介の状態をいうのではなく太陽の光線が強く、空気層の透明度が強いという媒介物に他ならない。晴天が天候の一種類であるようにまたスモッグや霧すらも天候の一種類であるのではないだろうか。晴天がスモッグや霧と並列的に存在する天候の一種類であるかぎり晴天という天候は見られる対象と見る網膜との間に存在するれっきとした媒介物であり、その媒介物の内容は光線が強く、空気層の透明度が霧やスモッグ時と比較すれば強いということである。霧やスモッグといった媒介物によつてビルが「灰」色に見えるならば、晴天という媒介物によつてビルを「白」く見せているのである。同様に信号の光点が霧やスモッグによつて「緑」色に見えるならば、晴天によつて「青」く見えるにすぎない。ビルの「灰」色や信号機の「緑」色が媒介物によつてそのように見えるように、ビルの「白」も信号機の「青」も媒介物によつてそのように見えるのである。わたしたちは媒介物を通過せずに物を見ることなどとても出きない。媒介物を通過せずに

物を見るとは、まさに見られる対象と見る網膜を密着させること以外にはないのであるから。そして晴天も霧もスモッグも同じ媒介物であるならばこういうことが成り立つ。

わたしたちは信号機の「青」色が、ビルの「白」色がみえるのは晴天の時としよう。その時わたしたちは信号機の「青」色の背後の光点に何色かが隠れて輝いているとか、ビルの「白」い壁の背後に何色かが存在するなどという発想はもち得ない。何故ならば信号機の光点の「青」色は光点自体の色であり、ビルの「白」色の壁は壁自体の色であることを疑わないからである。よつてその「青」色や「白」色の代りに「緑」色や「灰」色がでると、その色の背後には「青」色や「白」色が存在するという発想を生み出す。

がしかし信号機の「青」やビルの「白」色が晴天という媒介物によつて照らし出された色であり、その晴天という条件の時に信号機の「青」色の背後に又はビルの「白」色の背後に何色も想起出きないならば、スモッグや霧という条件の時、信号機の「緑」色の背後に、そしてビルの「灰」色の背後に何色も想起出きないのが当然であり、その背後に「青」色や「白」色が存在するなどという想起は、実は「青」や「白」を対象が原初的に持つていた色彩だとする

ことにおいてのみおこり、その原初的有色性を持つという物質はわたしたちの世界に開示しないかぎり、その想起はあきらかに幻想である。信号機の「青」色やビルの「白」色の背後に何色が隠されているか認識不可能のように、スモッグや霧の時点における信号機の「緑」色やビルの「灰」色の後ろには何色が存在するのかという問いに対して答えは「認識不可能である」としかいいようがないのである。信号機の「青」色も「緑」色も、ビルの「白」色も「灰」色も両者とも知覚像であり、その知覚像を通り越した後方に物質自体の色が仮りに存在したとしても、わたしたちの世界に永久に開示しないかぎり、そのような事象自体の色などは存在しない。

地球が「青」く見えようとその後後に「茶」色の地球が存在したり、海が「青」くみえてその後後に「透明」の水が存在するというのも全て近代の二元論の呪縛が生み出した幻想であり、地球の「青」も「茶」も知覚像であり海の「青」も「透明」も山の「黒」も「緑」も全て知覚像としてのみあり、更に知覚像としてのみ色が存在するということは色は意識との相関性においてのみ存在するということでもあり、その知覚像の背後に何色も視えない限り知覚像こそ

対象の色である。そして知覚像が距離や媒介の質によって変容するかぎり、一色に限定する対象自体の色などは存在しない。ここに存在過程を存在過程としてのみとらえる思想の観念的欠落がある。

ここにおいて客観的現実として顕在している物質の性質とは何なのかといえば、あきらかに主観によって客観という意味を附与されたかぎりでの客観的現実であり、主体の関与しない客観などという存在はたとえ存在しえても世界に顕在することはない。人間存在は自己に対して超越的に存在している即自存在に対する意識であると同時に、その意識は志向的対象である世界との関係の中で構成され、断じて世界によって構成されるのではない。色の問題の考察を通じて得たことは「青」色や「白」色という物質の性質が、それ自体として即自的に自然的自然として存在するのではなく、物質に性質や意味や無意味などというカテゴリーの問題が存在するのは人間存在の意識に照らし出されたかぎりにおいてであり、意味が意識によって与えられるなら人間存在は世界を生み出す原点に他ならず、始めから意味を与えられ構造化された世界に投げ出されたのではない。われわれの諸感覚を通じてのみ存在は世界に開示し、そし

て世界として構成されるのであって、わたしたちの諸感覚を通過する以前の存在自体としての世界は、視覚像たる信号機の「青」やビルの「白」色の背後に何色も把握することができなかつたようにわたしたちには捉えることができない。世界は世界それ自体として可能なのではなく、世界は意識との内面的関係の志向的総合においてはじめて世界として意味構成され、その表象として存在する意識、表象されて存在する世界との間に横たわる相関関係こそが一切の世界の根源的事象であり、その関係の永久普遍性において世界を物質因子の統一的世界としてではなく、またかのヘーゲルのような知の所産としての世界としてではなく、まさしく世界を存在と意識の交通関係としてみることでできるのである。

世界がまさしくそれを可能にする意識との相関性において成立し、色の問題においても事象自体の色が原初的有色性として最初にあつて、それから意識の色が規定されるのではなく、物質と意識との交通関係において色が成立するとき、物質が意識に対して存在論的優位性を持っているのではなかつたように、マルクスの「存在が意識を規定する」という言葉もサルトルの「対自存在の即自存在に対する

存在論的優位」を示す内容は物質の才二次的性質にあつては存在し得ない。そして彼らの誤断の根拠は、存在が意識に対して超越的であり先行性を示しているが、この即自存在の対自存在に対する先行性を、即座にサルトルの場合は即自存在の対自存在への優位性へと転化さし、マルクスにおいては存在が意識を規定するものとして判断したところにある。ただ即自存在が対自存在に先行していることからその関係を優位性の領域で考察することは非常に非科学的である。

そうであるからして意識は世界に対して意味構成する意味において主観であり、それと同時に意識が世界を意味として構成する存在として世界の一端をにない、意識はそこにあつて世界の一部として存在し世界として存在するが故に客観でもある。世界に対して主体であり且つ世界の一部として客体である意識はかかる二重性のもとに存在し、よって人間存在とは存在と意識の物質と幻想の交点に存在し、その人間存在は物質的自然に規定されて存在するのではない。よって人間存在が物質的世界に規定されて在り、かかる意味において具体的存在であるというのは幻想にしかすぎないのである。

【注一】マルクスは共産党宣言の中で「封建的な、家長的な、牧歌的な関係をすべて打ちこわした」ところの「ブルジョワジーは歴史上きわめて革命的な役割をはたした」と記しているがここに彼の革命観の一端をのぞかしている。ここではブルジョワジーは封建的集団に対して歴史上革命的であるとのことであるが、それは同時に封建的集団は歴史上ブルジョワジーに対して反革命であるということである。封建的集団とは家長的・牧歌的關係という存在過程の表象であり、すなわちその家長的な牧歌的な関係を打ちこわす資本の論理によって生まれたブルジョワ的關係は、封建的集団の關係よりはより革命的であるということである。マルクスにとって革命がプロレタリア的實現として存在するが故に存在過程における封建的諸關係を止揚するブルジョワ的關係は次にプロレタリア的關係を孕むので封建的関係よりも革命的であるということである。革命がプロレタリア的關係の實現として、そのプロレタリア的關係に歴史上近接する關係は、より時間的に遠い地点に存在する關係よりも革命的であり、

よって封建的関係よりもブルジョワ的關係が革命的であり、ブルジョワ的關係よりもプロレタリア的關係が革命的であるということである。がしかし封建的諸關係を崩すブルジョワジーが封建的諸關係を生きている人間よりも革命的だなどというのはプロレタリア關係を基準にして機械的にあてはめているだけにしかすぎない。砂川や北富士、三里塚といった封建的関係の中に居た人間よりもブルジョワジーや、その封建的関係を崩した機動隊は革命的であるというのであるか。でもマルクスのようにプロレタリア關係を基準にして革命を機械的に規定するならば、三里塚の人間よりは機動隊が歴史上きわめて革命的な存在になるだろう。観念論を欠落させた存在論的革命論からすれば現在において機動隊こそ革命家である。

権藤成卿論

共同体への照射

久保 隆

第一章

(1)

奈落の時間性を強要され、おしなべられた空間性を受苦することに「現在」があるとすればそれは、まさしく逆倒された「未来」を与えられているにすぎないということになる。にもかかわらず、ただそのことを背理とする「思念」を包有しつつもただ与えられた踏場を歩行していかねばならないのはなぜか。

「生」の共同性が既に「政治」の共同性の下位相にすぎないという幻想が少なくとも私たちに「政治」的解放だけ

を未来時における願望と視ることを強要しているということとは確かであると思われる。所詮、「政治」的解放は、「生」の自存などとは連関せず、ただあるのは擬似「共同性」へと集約されていく過程だけである。しかしその「政治」的共同性はまさに時空的に「国家制」に支えられてのみ存立するという内実を有している。かかる「国家制」とは「生」を擬似「共同存在」へと転位させ、その限りにおいて国家的「未来」に包括するという幻想性を付与させていくわけである。そして私たちの奈落の時間の上にはその「国家制」の時間が歴然とおおいつくしているのである。

「異貌」の思想者であるところの権藤成卿の心底にはおそらくかかる「国家制」に対する深遠なる憤怒があったのではないかと思われる。思想「史」的には、ほとんど彼方